

ご挨拶 (クレルモン・フェラン)

E.カタン、E.シュワルツ、 哲学・合理性研究センター、クレルモン・フェラン

この報告書に集められた論文は、2006年3月29日にクレルモン・フェランで開かれた国際シンポジウムの折に発表されたものです。このシンポジウムは、エクス市のプロヴァンス大学・エルゴロジー学部の協力を得て、東京のお茶の水女子大学「比較日本学研究中心」およびクレルモン市のブレイズ・パスカル大学の「哲学・合理性研究センター」(PHIER, EA 3297)により共催され、仏日両国の思想家・哲学者による共同作業の現状を定期的に明らかにすることを目的としてこれを機に正式に始められた会議のまず第一弾となることを願って開かれたものです。

ここに述べられている協力関係は、潜在的には、今回再び集まったグループの歴史の中にすでに非常に自然なものとしてあったものです。日本と西洋の伝統の比較研究は、確かにお茶の水女子大学で行われている研究プログラムを規定するものですし、それに関する発表論文はこの論文集の始めの方に掲載されています。こうした専門化は、ここに代表されているフランスの研究者にとっては、このほか特殊な興味や関心を、さらには、旨とされる協力関係の将来に決定的な影響を及ぼす興味や関心をも惹き起こすはずでした。フランスの研究者にとって、比較研究は、その研究成果や論文を大陸間の境界を越えることを義務とする国際水準で伝えるという、研究に今日課された必要性に導かれているというだけではありません。ヨーロッパ外での交流を北アメリカという地域だけに限定してはいけないという、確固とした思慮にリードされてもいるのです。

比較研究は、その初期の段階では、フランス語と日本語というそれぞれの原語で書かれたテキストをもとに、二か国語のテキストを研究できるということが決定的に重要なことでした。しかし、さらに深く見ると、比較研究はわれわれの研究対象に内在的でもあるのです。「哲学・合理性研究センター」は、エクス＝アン＝プロヴァンスのチーム、古い比較認識論セミナー、そしてG.グランジェ氏によって設立された比較認識論・エルゴロジーセンターとの古くからある協力関係の延長線上に、クレルモンに創立されましたが、このセンターは、哲学史に関する著作どうし、またそのような著作と科学や実践のおよび理論的認識の歴史・哲学に関する著作の間に同時に行われる比較研究を含む広範な活動を表明しています。それによって、日本についての学問を確立するのに寄与したジュール・ヴィーユマンのような学者の著作によってクレルモンで有名にな

った伝統と繋がっているのです。

この報告書に収められたものは、数々の研究成果、すなわち、これまでに切り拓かれて来たさまざまな道程です。この会議は、長期にわたる協力関係の始まりでありまた予備作業となるシンポジウムとして、日本の同僚たちが提案し、その同僚たちはオーヴェルニュの地での開催にたいへん献身的に尽力されました。そしてすぐに、全体の方向性が細部にいたるまで組織されたものとして発表されたのです。シンポジウムは、まず、日本とフランスという二つの文化伝統に見られる宗教思想と倫理観の関係に限定されたテーマで予定されていましたが、結局は、最終的な題名『哲学・倫理および宗教思想』に表現される、より大きなテーマへと広げられました。この最終的なテーマのおかげで、仏日双方にまたがる比較ばかりでなく、それぞれの文化伝統に内在的な比較に十分配慮した方向性を、制限なく発揮させることができるようになったのです。

まず文化間の比較と言いましたが、それは、同僚である日本の教授や博士課程研究者がクレルモンにもたらしけてくれたもの、すなわち、フランスの同僚たちに、同様にまた、わが学生や博士課程研究者に日本を発見に行く使命感を呼び起こすようにしてくれたもののせいなのです。それは、一方では、西洋ではまだ全く知られていない東洋の伝統に属する著作や文献に関する本質的な研究——道元禅師や白隠禅師や本居宣長のような中世・近代の宗教的精神性にあふれた哲学について論じたもの(頼住助教授と博士課程研究者の論文、および大久保氏の論文)であり、あるいは、西田幾多郎という哲学者の現代の著作について論じたもの(博士課程研究者の論文)——であり、また他方では、西洋の伝統を代表するようなテーマへのアプローチや著作者——古典的なものとしては、ヒューム、カント(博士課程研究者の論文)、現代的なものとしては、レヴィナス(B.ブルジョア教授(パリ第1大学名誉教授、フランス学士院会員、また「哲学・合理性研究センター」の客員教授でありドイツ専門分野に関する比較講座をその開設以来担当の指導の下にある日本人博士課程研究者の論文)、デュエムとクワインおよび西洋認識論(三浦助教授の論文)——が挙げられ、これらはすべて、今日の日本のアプローチと方法論の反映と見ることができるのです。

比較は、この会議の主題自身に内在的なものでもありません。一方では、黄金率に関する発表(L.ジャフロ教授)が古典と近代の伝統に関する発表論文(大久保氏による本居宣長論)に呼応しているように、プロティノスにおける「超脱」の思想(A.プチ助教授)やマイスター・エックハルト(E.カタン教授)に着目したフランス側の発表論文は、道元、白隠、西田についての日本側の発表論文に呼応する

形で、たしかに、ある潜在的な共通財産、さらには、われわれの二つの大陸に古くからある遺産からの直接および間接の伝統の有効性についても証言しています。こうした接点に刺激された証言は今回の交流の嬉しい結果のうちでも、けっして取るに足らないものではありませんでした。それによって、クレルモンで実践されている、体系間の比較哲学の歴史の広がり——それは、これまで、われわれの手によって、カントからヘーゲルとその継承者までのドイツ哲学の古い遺産の方向へと導かれて来ており、また、カドワースからブラッドレーまでの古典的で英国的な観念論の比較アプローチへと導かれることもほとんどなかったもの——は、真にその意味を充実させられるようになったのです。また、他方では、分析哲学にその起源をもつ哲学的伝統の観点から見るとすでに分かることですが、哲学の歴史に密接に繋がりそこから切り離せない認識論のクレルモン派による実践は、まさにそのテーマおよび (E. シュワルツ教授および Y. シュワルツ教授によってフランス語で発表されたような) 認識の可能性の条件と普遍的なものに関する比較科学の可能性の条件についての問いという争点にさらに広く目を向ける発表論文 (高島教授および三浦助教授) と思想を同じくすることがただちに見て取れたのです。

2006 年春のシンポジウムでの会議と議論をまとめたこの報告書論集は、われわれの側でもヨーロッパの出版社のもとで出版の準備をしているところです。この論集が、お茶の水女子大学とクレルモン・フェランのセンターの間の未長く実り多い協力関係へと道を開いてくれることを、強く願っております。そして、それによって、これら二つの文化伝統の中にすでにしっかりと実感されている、あの考え—— (それぞれの文化の多様さの中にしか書き留められ生じることがない) 哲学というものが、その必然的な分割の反映として、すべてを統一しそれに生命を吹き込む普遍的なものにさらにもっと必然的な強い願望を読み取ろうとすることができるという考え——が、きわめて特別な明晰さをもって明らかにされることを願っております。

(翻訳・石田 安志 (東京女子大学非常勤講師))